The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	島津先生との思い出
Author(s)	近本, 謙介
Citation	語文. 2017, 108, p. 9-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71003
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

島津先生との思い出

近本謙介

先生とのわかれ

おそらくだれもがそうであるように、わたくしも島津先生がすきだ。ひとが生きるうえでの、ほんとうにうつくしくすがすがしいたたずまいを感じさせる方であった。

敬愛という語が、島津忠夫先生に対する思いにもっとも近いことばであるかもしれない。不世出の知の巨人であり、畏怖すべき国文学者であることに疑いの余地はないが、親しく接した者のだれもが愛さずにはいられないお人柄と、それを受け容れる度量を持ちあわせておられた。

島津先生と最後にお目にかかったのは、平成二十七年九月十五日、お亡くなりになるちょうど七箇月前である。阪大の先輩である佐藤明浩さん（都留文科大学）に声をかけていただき、お嬢さまの近くで療養するためお住まいであった所沢のマンションに伺った。それも、ご病状が落ち着いている時期を見計らって、島津先生ご自身が「会いに来るならいまやでえ」とおっしゃってくださったのにうながされての訪問であった。部屋に招き入れてくださった先生は、少し痩せてはおられたが、執筆中の『源氏物語』論の完成への見通しについて、悲壮感も高揚もなく淡々と、しかし元気に語られた。夕刻からは、予約しておいてくださった近隣の行きつけの居酒屋で呑んだ。お酒の量には制限がかかっているとおっしゃる先生は、許された一杯だけをしずかに干しつつ、弟子たちには酒をすすめてくださった。以前からたくさん召し上がるわけではなかったが、魚のうまさから、なにゆえこの店を行きつけとしておられるのかがすぐに了解された。

この夜は、学部生時代から毎月ご一緒しお世話になった阪大短歌会のあとの、石橋の寿司屋すしよしでのしあわせなひとときの再現であった。お見舞いに伺う前の心配に反して、とてもお元気そうであったことから、島津先生にはこれからもお目にかかることができるというおぼろげな安心感を抱きつつ別れたのが、師と

いつもと変わらぬ島津先生との至幸のかたらいの夜

ことばを交わす最後の機会となった。最後の面会の時期まで師のほうから取りはからっていただく不肖の弟子であるが、三十年以上前と変わらぬお元気な姿を面影とできたことをありがたく思う。

島津先生が交誼を結ばれた多くの方々それぞれにかけがえのない思い出があるなかで、わたくしにとってのそれはささやかなもののひとつに過ぎないかもしれないが、大阪大学における先生との出会いは、見えざる手が取りなしてくれた素敵な思し召しであったと信じている。そのたいせつな先生との思い出の一部を、追悼の意を込めて記すことをお許しいただきたい。

大阪大学教養部での出会いと文学部の頃

島津先生との最初の出会いは、木曜二限の旧教養部イ号館最上階の教室であった。木曜一限という、学生からは歓迎されない時限に配当されていた文学部体育の授業の後、急ぎ着替えて階段を駆け上がった教室に先生は現れた。最初の授業で、『平家物語』の伝本とその問題点について弾丸のように講じたのち、「今年は流布本『平家物語』巻五の本文を版本で読むから、来週までに最初の丁を翻字してくるように」と言い残して、師は足取り軽く去って行かれた。二倍速のような早口でありながらも、その内容が伝わってくる明晰なお話（それは終生変わることはなかった）には驚いたが、たかだか入学したての教養部の学生に細部まで理解できるはずもなく、漢字変換を諦めた用語を交えつつ、ひたすらノートをとり続けた。そこまでは良しとしても、最後に課題と

して言い残された「翻字」なるものには面食らった。手元には、なんとなく大学生になった気になれる『平家物語』本文があるが、このまったく読めない文字をどうやら来週までに解読してこないといけないらしい。もしや自分だけが読めないのかという不安に駆られ、だれからともなく受講生がたがいに探りを入れ始めた後、どうやらみな同じ状況らしいということが判明したときの、なんら問題の解決にはならない安堵感は、いまでも思い起こすことができる。

数年前にお目にかかり、近年の過保護とも思える大学の状況について話した際に、「学生っちゅうのはなあ、面倒みればみるほどあかんようになんねん」と口にされたのが印象に残っている。翻字の課題は、師の与えたもうた、最初の温かい試練であることを知ったのである。

同時に、島津先生はもっとも真摯に本質的な教育を意識した研究者でもあった。阪大短歌会でお世話になり始め、石橋から池田の会場に向かう道すがら、先生が講義内容のローテーションについてお話になったことがある。中世の講義・演習では、「和歌・連歌」（韻文）・「軍記」（散文）・「能・狂言」（芸能）の三つを毎年順に取り上げており、教養部から学部までの三年間でそれらの研究方法をひと通り身につければ、卒業論文では中世のどの分野でも一応できるようになるとのことであった。すでに中世の説話を卒業論文のテーマとすることを決めていたわたくしは、「説話の授業が入っていませんが、どうすればよいのでしょうか」と、学部生ながら果敢に質問した。先生からの答えは、「説話はひとりでできる」という単純明快なものであった。これから卒業論文に取り組もうとする幼気な学部生にとっては、なんとも見捨てられたかのさびしさをおぼえたが、上記三つの領域の研究方法を学んでおくことの必要性と、それらが入り交じった説話研究の実態をみずから理解するのには、幾年かの歳月が必要であった。

『島津忠夫著作集』第十三巻（和泉書院刊　二〇〇七年）二五四頁によって、こうした三つの領域を基軸に据えた講義のあり方が、穎原退蔵先生・中村幸彦先生を経て、佐賀大学時代の島津先生に意識されたものであることを知ることができる。遠く及ばないながらも、わたくしなりに大学の講義や演習では、同様のことを実践したりもしている。

卒業論文のテーマとして『閑居友』を考えていた折、同じく短歌会への道すがら意見を求めたところ、師はすぐにこうお答えになった。「あの作品はなあ、まだまだいっぱいやることがあんねん。でもなあ、いまやってもなんも出えへんかも知れんでえ」。上・下巻合わせて三十数話の小規模な集であることも意識なさったうえでの助言であったと思われるが、なにより、学部生の問題意識と調査能力で得られる成果について、あっという間に見抜いてのご意見であったろう。『閑居友』と編者慶政をめぐるいくつかの論を発表するなかで、先生のおっしゃったことがおよそ理解できたのは、二十年後のことである。

卒業論文では、『閑居友』の前後、すなわち『発心集』と『撰

集抄』を検討した末、『撰集抄』の成立論をテーマとすることに落ち着いた。

大阪大学大学院文学研究科の頃

卒業論文を書き上げた後、大学院入試の合格発表日、なんとか合格させていただいた結果報告のため、教養部の先生のお部屋に伺った。結果を喜んでくださり、短歌会終了後と同じように、石橋の坂下にあったすしよしにお連れくださった。先生とふたりきりで呑んだ数少ない機会のひとつである。

「いやあ、信多くんと伊井くん、ようとってくれたなあ」というおことばには、わたくしの成績に対する不安が多分に含まれていたものと思われるが、そこは自分で乗り越えるしかないところであるという、どこか毅然とした気配も感じ取ることができた。とりあえず四月からの身分が保証された学部四年生の喜びをよそに、先生は中世文学会への入会、春季大会への参加を矢継ぎ早に指示された。なんのことやらわからぬまま、大学院進学後、そのご指示にしたがったのは言うまでもない。

ほんとうに幸運なスタートを切らせていただいた。すしよしでの指示は、およそ半年後の中世文学会秋季大会での発表と連動していた。学会のなんたるかもわからないうちに発表させていただいたのは、いま思えば空恐ろしくもあるけれども、おかげであれこれと考える余裕すらなく学会デビューを果たすことができた。

学会誌への掲載をめぐる委員の評価という学会の仕組みも、随分後になってやっと詳細を知ったのだが、当時中世文学会の委員であった先生に、あのとき、わたくしの発表に対してはどうなさったのですかとお尋ねすると、「そりゃ、棄権や」と即座にお答えになった。いかにも島津先生らしく、そこは自分で乗り越えるしかないところであるという気配を、からからと笑っておられる笑顔の向こうに、ふたたび感じ取った瞬間であった。

島津先生は、紛れもなく最初にわたくしの研究を評価してくださった恩師であるが、その判断の尺度は、「いやあ、僕の考えてきた『撰集抄』のイメージとちがってたんけどなあ、成り立ってたんでなあ」とおっしゃったように、あくまでもみずからの文学史のスケールに影響を与えるかどうかという、極めて深い研究レベルでの発想に根ざすものであった。師の背中が、いつまで経っても近づいてこない所以である。

『撰集抄』の成立論を学会誌にまとめる際に、中村幸彦先生の「擬作論」に目を通すようにとのご教示をいただいた。修士課程の浅学の身には、中村先生の説かれた時代を横断する深い文学史的テーマも、それを踏まえるようにご指示くださった島津先生の意図も、十分に活かすことはできなかったが、「擬作」というテーマは、現在に至るまでわたくしの問題意識の中核のひとつを占め続けている。

島津先生がもっとも楽しい時期だったと語られたことのある佐賀大学時代は、中村幸彦先生が九州大学におられたこととともかかわるようである。「擬作論」をめぐる問題意識を含む先生の思い

は、『島津忠夫著作集』第十三巻・二五六頁から窺うことができる。わたくしが『撰集抄』の成立に関心があること、さらに中村幸彦先生のお勤めであった天理大学に奉職したこともあってか、中村先生の故郷淡路の風景と『撰集抄』の擬作とのかかわりを確認する旅に誘ってくださったことがある。島津先生がお書きになっているように、その旅が実現しないままとなったことは、わたくしにとってもたいへん残念なことであった。

大阪大学大学院修了後

大学院修了後は、学会でお目にかかることは幾たびもあったが、わたくしの勤務先が関東に移ったこともあり、日常的にお姿に接することはなくなった。お目にかからない時期が数年に及んでも、再会の際のぎこちなさを感じることがなかったのは、先生のお人柄に拠るところが大きいが、恩師に対して不遜ではあるものの、たとえば親友との無沙汰の距離が再会ですぐに埋められるのと似た類いのものにも思えていた。

そうしたなか、先生のおしごとに向き合う機会も、師のほうから与えていただいた。著作集第一巻「文学史」の校正を依頼されたことは、島津忠夫の文学史構築を追体験する得がたい経験となった。「中世文学とその背景」（二四九頁）に問題提起されるフレーズをはじめとして、印象深く肝に銘じるべき教えは少なからずあるけれども、ここで言及するのはやめておこう。

和歌や連歌はさるものとして、先生が中世文学を考える際に『平家物語』に重きを置いていたことは、著作集第十巻「物語」に所収される十指にあまる論考からも窺うことができる。しかしながらそれも、先生にとっては、文学史を見定めるうえでの、必須の作品の布置のための営みの一隅であったろう。広範な問題意識に寄り添うことだけでも凡人にはたいへんなことではあるが、『兵範記』紙背に見える「治承物語六巻号平家」の記事の意味するところを、素朴なテクストの事実に基づきながら、しかるべく分析された『平家物語』の形成論「入道死去とそれ以後」（二一〇～二二一頁）などは、感銘を受けた論考のひとつである。それに応えた平家論は、みずからを振り返るとたった一本しか論文にできていない。忸怩たるものがある。

この追悼の文を草するにあたり、綴っておきたいことを箇条書きにしてみた。その半分も記し得ていないうちに、もはや紙数は尽きようとしている。

島津先生が、愛知県立大学から大阪大学に赴任なさったのが、昭和五十五年（一九八〇）四月、御退官が平成二年（一九九〇）三月であるから、大阪大学での在職期間は十年である。その必ずしも長いとは言えない在職期間に残されたあまりに大きなものを前にして、立ちすくむばかりである。同時に、教養部の学生時代から大学院生の途中まで、身近にその謦咳に接しつつ過ごすことのできたしあわせを改めてかみしめている。

図らずも、師の大阪大学赴任と同じ年齢になる年に、わたくしは新たな勤務校名古屋大学へと転任することになった。在職期間

の短さは、なにをなし得るかの言い訳にはならぬことを恩師は身をもって示された。あまりに高いハードルではあるが、器量にしたがって成すべきことを成すしかなかろう。

名古屋への赴任が決まってすぐに想起したのは、そこが島津先生と有縁の地であることであった。先生は、著作集第十三巻「作品」のなかで、「今、残っているいくつもの仕事を終えてなお余生があれば、名古屋か郡上に退隠し、私も一冊だけは歌集を編みたいと考えている」（九六頁）と記しておられる。その自選歌集『心鋭（と）かりき』が、思いの外早くに編まれることとなったことを前提にすると、お元気な「余生」をどのように過ごそうとなさったかは先生のみ知るところであるが、もしもその幾ばくかの年月を、名古屋や郡上で身近に接しながら過ごすことができたならばと、叶うことのなかった夢に心は揺れる。

若き日の島津先生の歌を集めた歌集「花筐」（前田裕志氏撰・著作集第十三巻所収）冒頭「若き日」歌群の巻頭歌は、「円座（わらふだ）に坐りてしばし対ひをり藤原仏はおほらかにます」である。昭和二十二年十月、京都歌会での作との注記があり、所収歌中もっとも早い時期の詠歌。

研究室旅行の折であったろうか、旅先の寺に安置された仏を前に、大阪大学古美術研究会彫刻班に所属していることを島津先生に申し上げたことのあるわたくしは、「この仏は、面立ちに温和な定朝様のイメージがあるから、藤原時代の作であろう」などと、えらそうにいい加減なことを言った。間違っていたらからかってやろうと、だれかが解説を読んで、結果的に藤原時代のものであることを確認したところ、先生は「当たった当たった」と言って、無邪気に笑っておられた。さきに引いた詠歌のあることは、もちろん存じ上げなかったが、京都で学生時代を過ごされた先生であってみれば、仏像彫刻の様式論にもかなり通じておられたのかも知れぬ。時代が当たっていて、ほんとうによかった。

先生が藤原仏の歌を詠ぜられたのと同じ年齢の頃、わたくしはまさに阪大短歌会で先生と接していたことになる。「打ちのめされまた励まされ本棚の特等席に据え奉る」（大阪大学短歌会・年刊歌集『風輪』七集　昭和六十一年）。この歌に島津先生が点をくださったかは覚えていない。もとより『島津忠夫著作集』を意識して詠んだ訳ではなかったが、いまとなっては、この高く聳える頂きこそ、詠歌時の思いそのままの書である。

所沢でご自身の体調と対話しながら完成を期しておられた『源氏物語―どのようにして書かれていったのか』（和泉書院刊　平成二十九年四月十六日）は、一周忌に著作集別巻三として世に出た。逝きてなお、師のうしろ姿は大きくなるばかりである。

生前にお目にかけたかったものや、ご報告したかったこともあるが、日頃の怠慢は後悔しても手遅れである。それらは郡上の墓前に手向けることを期すしかあるまい。敬愛してやまない恩師の笑顔の面影を胸に、心あまりて詞たらずの追悼の筆を擱くことにする。

（ちかもと・けんすけ　名古屋大学准教授）